

ベスト・プレイズⅡ 目次

ソポクレス アンティゴネ

北野雅弘 訳 7

エウリーピデース バツカイ

西村太良 訳 45

シェイクスピア 夏の夜の夢

井上 優 訳 91

シェイクスピア リア王

小菅隼人 訳 143

ロペ・デ・ベガ フエンテオベフーナ

田尻陽一 訳 219

モリエール タルチュフ

大谷理奈 訳 269

マリヴォー 愛と偶然の戯れ

奥 香織 訳 319

リ ロンドン商人

安田比呂志 訳 365

ゴルドーニ 二人の主人を一度に持つと

鈴木国男 訳 423

シラー
オルレアンの乙女

新沼智之 訳
489

イブセン
ゆうれい

毛利三彌 訳
575

チエーホフ
三人の姉妹

永田 靖 訳
631

ピランデッロ
作者を探す六人の登場人物

大崎さやの 訳
687

劇場のかたち

本杉省三
751

西洋演劇略年表

辻 佐保子
763

あとがき

小菅隼人
774

プロフィール

777

ソポクレス

アンテイゴネ

北野雅弘
訳

登場人物

アンティゴネ テバイ王クレオンの姉イオカステとその子オイディ

プスの間に生まれた長女（第二俳優）

イスメネ アンティゴネの妹（第三俳優）

コロス テバイの長老たち

クレオン テバイ王（第一俳優）

見張り（第三俳優）

ハイモン クレオンの次男（第二俳優）

テイレシアス 盲目の老予言者（第二俳優）

エウリュディケ クレオンの王妃でありハイモンの母（第二俳優）

使いの者 クレオンの家内奴隸（第三俳優）

その他、台詞のない黙役として、クレオンの家来たち、アンティゴネの護送兵、テイレシアスを導く童が舞台上に登場する。

プロロゴス

夜明け前。正面中央に円形舞台（オルケーストラ）があり、俳優とコロスの演技空間になっている。正面奥の建物（スケナー）はテバイの王宮を表す。スケナーには戸口があり、王宮の入り口になっている。扇型に拡がった観客席とスケナーの間には両側に通路（パロドス）があり、合唱隊（コロス）を含め、王宮の外より登場したり、外へ退場したりする人物が利用する。

アンティゴネとイスマネ、王宮内より登場。

アンティゴネ　ねえ、血を分けた同腹の妹、イスマネ、お父様オイディプスの禍いのうち、まだ生きている私たち二人にゼウス様が降されていけないものが、果たして、いったい何があるのか、あなたには分かる？　苦しみでも滅びでも、屈辱でも恥でも、あなたと私の禍いのうち、私が目にしてこなかったものは何一つない。今ももちろん、將軍がこの国じゅうに布告を出したと言われているけれど、それがどんなものなのか。あなたは何か聞いている？　それともあなたは知らないの？　憎い敵の禍いが、愛しい身内に近づいているのだと。

イスマネ　二人の兄様が互いの手にかかつて一日のうち

亡くなり、私たち二人から奪われたその時から、アンティゴネ姉様、私には、身内について、甘いのも苦いのも、どんな話も届いていません。アルゴスの軍隊がいなくなったのはまだ今夜のことなので、それ以上は何も分らないのです。これから幸せになるのか苦しむことになるのかも。

アンティゴネ　そうだと分かっていたので、中庭の門の外からあなたを呼び出していたのです。あなただけに聞こえるようにと。

イスマネ　どういうことですか？　思い詰めた不吉なお言葉に聞こえます。

アンティゴネ　だって、クレオンは、私たちの二人の兄様のうち、一人には誉れあるお葬式を認めるのに、もう一人は貶めて許さないので。聞いたところだと、エテオクレスのことは、習わしに合ったやり方が正しいと地下に埋葬し、あの世で死者の方々にとっての誉れとなることを許すのに、可哀想にもポリュネイケスは、死んだからとてその亡骸は決して墓で覆ってはならぬ、嘆くことは誰にも許さぬ、嘆きも埋葬もなく野ざらしにして、食欲を満たそうと血眼の禿鷹のために甘い餌箱にしろと、市民に布告がなされたとのこと。そんなことを、あなたのご立派なクレオンはあなたにも私にも、そう、私にまで命じたそうよ。そしてここに戻ってきて、まだそれをよく知らない市民たちに布告しようとしているの。この問題を些細なことだとは考えていなくて、それどころか、何であれこうしたことをした人間は町中で石打ちの

一〇

三〇

二〇

刑に処すというの。そういう有様なので、あなたも、気高く生まれついたものなのか、血筋は立派だけれど人柄は卑しいのか、すぐに示すことになるでしょう。

イスメネ ああ、可哀想な姉様、そんなことになってい
のなら、私なんぞがどう足掻いたところで、いったい何
のお役に立てるといふのでしょうか？

アンティゴネ 考えてちょうだい。辛苦を共にし事を共に
なす気があるのか。

イスメネ どんな危ないことをですか？ 何を企んでいら
っしゃるの？

アンティゴネ (手を差し出して) この手と共に亡骸を持
ち上げてくれるかしら。

イスメネ まさかあの方の埋葬をお考えですか？ 国が禁
じているというのに。

アンティゴネ ええ、あなたが望まなくても、私にもあな
たにも兄様だもの、私が埋めて差し上げる。裏切りの責
めを負うなど決してありはしない。

イスメネ なんて無謀な。クレオンは駄目だと言っている
のですよ。

アンティゴネ 私の大切な人たちから私を引き離す力など
あの男にありはしないもの。

イスメネ なんてこと。姉様、良く考えて。私たちのお父
様は、憎まれて惨めにお亡くなりになった。ご自分が暴
いた過ちのために、ご自分の両眼を、ご自分の手で突き
刺したのです。それから、母と妻の二つの名を持つ方
が、編んだ縄で命を絶った。そして三番目に、二人の兄

四〇

弟が、哀れなことに一日のうちに殺し合って、お互いの
手にかかってもに討ち果てたのです。ですから、今、
二人つきり残された私たちが、法を破って王様方のお定
めや権力に逆らうなら、いったいどんなに酷い死を迎え
ることになるのか考えて下さい。女に生まれついた私た
ちは、男と争うようには出来ていないと承知せねばなり
ません。私たちは自分より強い人たちに支配されている
ので、今度のことであれもつらいことであれ、従
うべきなのです。ですから私は、地下にいらつしやる
方々には、これは無理強いされてなのだとご容赦くださ
るようお願いし、権力をお持ちの人たちに従おうと思
います。弁えのない振る舞いはまったく理に適っていま
せんもの。

六〇

五〇

アンティゴネ 私は命じるつもりはない。だが、後になつ
てから事をなしたいと望んだとしても、おまえがわたし
と一緒にするのは御免だ。どうとでも思い通りになさい。兄
様は私が埋葬する。そうして死ぬのは私の誉れ。清き罪
を犯して、愛する身内として兄様と、愛する身内と横た
わりましょう。この世の人たちよりも、地下にいらつし
やる方々を喜ばさねばならない時間のほうが長いよ。
私はずつとあちらに横たわるのだから。でも、それ
が良いとおまえが思うのなら、神々が立派だとされるこ
とを辱めていれば良い。

イスメネ 辱めることなんてしていません。ですが、私の
生まれつきでは、国の人たちに逆らつて何かをなすなど
出来ないのです。

七〇

アンティゴネ そうやって言い訳を並べていなさい。私は最愛の兄様に塚を盛つてあげるから。

イスマネ ああ、可哀想な姉様。姉様のことが心配です。

アンティゴネ 私の先行きを案ずることはない。我が身の定めを突き進むことね。

イスマネ でも、そのお仕事のことは誰にも公言したりせず、こっそり隠しておいて下さい。私もそうしますから。

アンティゴネ まあ。言い触らしなさい。これを皆に触れ回らずに黙っているなら、もつとおまえが憎らしくなる。

イスマネ 凍えるようなことをするのに、熱い心をお持ちなのね。

アンティゴネ 一番気に入っていただかねばならない方がちが喜んで下さると分かっているからよ。

イスマネ お出来になるのなら、でも叶わぬことを望んでいらつしやる。

アンティゴネ そうね。力及ばぬ時には止めることになるでしょう。

イスマネ そもそも、叶わぬことは求めてはいけないのです。

アンティゴネ そんなことを言い続けるなら、おまえは私を敵に回し、亡くなった兄様にとつても敵と呼ぶのが正しいことになるわよ。だから、私を放っておいて。私が馬鹿なせいで恐ろしい目に遭っても気にしないで。美しく死ぬことも出来ないほどの酷い目には遭わないでしょ

八〇

うから。

アンティゴネ、パロドスより退場。

イスマネ (退場しつつあるアンティゴネに) ならば、それが姉様の考えなら、行つて下さい。でも、忘れないでね、姉様は分別を無くしかけていているけれど、身内にとつては本当に愛しい人なのだから。

イスマネ、王宮内へと退場。

パロドス

朝。テバイの長老たちを演じる二五人のコロスがパロドスより登場。

九〇

コロス 旭日の輝きよ、七つの門を持つテバイを照らす

かつてなく麗しい光、漸く御身が

現れて下さった。ああ、デルケの川の

流れを越えてお見えになった

黄金色の暁の眼よ、

鎧に身を包み白き盾を持つ

アルゴスからの兵どもを、

鋭き轡を馬に嚙ませ、

一目散に敗走させた輝きよ。

一〇〇

憎しみの諍いの末、怒りに駆られたポリュネイケスが、

二一〇

我らが土地に導いた敵は、

驚きながらの甲高き叫びを上げ、

雪の白さの翼で覆わんと、

大地を目指し襲いかかった。

夥おびただしき武器を持ち、

兜には馬の毛の飾りをつけて。

町並みの上に降り立ち、

血に餓えた槍で

七つの門の入り口を

一飲みにせんと取り巻いたが、

我らが血を嘴で貪り尽くす前、

塔が輪をなす町の壁を

へパイストス様の松明の

火が捉える前に立ち去った。

アレス様の、敵の背に向けて立てる轟きは

それ程激しく、大蛇に敵して勝利はなきものを。

ゼウス様は、大言壮語を酷く憎まれ、

黄金の響きを持つうぬぼれのために

濁流のごとく押し寄せる者たちをご覧になるや、

目指す壁の頂きに手をかけ

勝ち鬨を上げようとする男を、まさにその時

炎の矢を投げつけて撃ち倒される。

二一〇

ぐらりと揺さぶられ、固い地面に落ちて潰れたのは

松明を持つ男。かつては怒り狂い、

バッコス様の狂気に憑かれたかのように

憎しみの息を激しく吐き出していた。

彼の末路は思いの外、

他の者どもは、頼りとなる助け、偉大なるアレス様が

打ちのめし、それぞれに違う死の定めを与え給うた。

七つの門には七人の将軍、

同じ数の敵に向かい、勝利をもたらしたゼウス様に、

青銅造りの甲冑を捧げた。

だが一人の父、一人の母から生まれた

呪われたお二人は別。

二重に滅ぼす槍を互いに突き立て、

死の定めを等しく分け合う。

さておき、名譽をもたらすニケ様が

戦車多きテバイの喜びに應えてお出ましになった。

忘れよう、やつと戦が終わったのだ。

神々のお社すべてにお詣りし、夜を徹し歌と舞を奉たてまつろ

う。

バッコス様がお導きになり、それで

テバイの土地を揺らして下さいますように。

見よ、この国の王、

メノイケウスの御子クレオン様がお出まします。

二二〇

一四〇

一五〇

新たな天運により、新たに支配者におなりの方。

こうして皆に使者を遣わし、

年寄りを集めた審議をご提案とは、

いかなる策をめぐらしておられるのか。

第一 エベイソデイオン

クレオン、家来たちとともに王宮戸口より登場。

一六〇

を大事にする輩は屑だとも言おう。

すなわち私は、常にすべてを見通すゼウス様もご承知あれ、この国の民に安全ではなく滅びが迫るのを目にしながら口を噤むことなど出来ぬし、国の敵となる男を我が友とすることもありえない。国こそが我らを護る船であり、正しく進む船に乗ってこそ友も得られると知っておるからだ。このような理に従うからこそ、私は国を豊かにするのである。

一九〇

クレオン 諸君、神々は、この国の安全を幾たびもの荒波で激しく揺り動かしたが、再びしつかりと建て直された。使いを出して全市民のうちから諸君を呼び寄せたのは、まずは諸君が、ライオスの王座の力を常に崇め敬ってきたこと、また、オイディプスが国を率いていた時もそうであったこと、さらに、彼が滅した後も、その子供たちのために変わることをない気持ちを持ち続けてくれたこと、これらを私が良く知っていたからだ。彼らは二重の運命によって、互いに討ちかつ討たれて、身内殺しの穢れとともに一日にして果てた。私は、亡くなった二人の最も近い親族であることによって全権と王座を得ている。男子たるもの誰であれ、権力や法を行使すること

一七〇

で験されてはつきりするまでは、その性根も考えも分別も見極めはつかない。すなわち、私の考えでは、誰であれ、国全体の舵取りをする立場にいながら、最善の決断を行わず、何かを恐れて口を閉ざしたままでは、今も昔も、最悪の人間なのだ。おのれの祖国よりも身内

一八〇

私の考えは以上であり、義人を差し置いて悪人が我が手から誉れを受け取ることは決してない。だが、この国をおもう人間は誰であれ、死んでいようが生きていようが等しく、私からの敬意を受けとるであろう。

二一〇

コロス、メノイケウスのお子クレオン様、この国の敵と味方を、そのように扱われるのが王様のご意向でございま

二二〇

すか。死んだ者に対してであれ、生きている私たちに対してであれ、確かに王様はどのような法でも用いることが出来るでしょう。

クレオン それで諸君は、私が今言ったことがらの監視役として……

コロス（割り込んで）その役目はもつと若い人にお申し付け下さいませよう。

クレオン いや、死体の監視なら既に手配している。

コロス では、それに加えていったい何を求めたのですか？

クレオン 布告に逆らう者に味方しないことだ。

コロス 死刑を望むほどの愚か者はおりません。

クレオン 確かに報いはそれだ。だが、欲得はしばしば人を滅ぼすものだからな。

見張り、バロドスより登場。

見張り 王様、自分が、息が切れるほど大急ぎで、宙に浮くほど足取り軽くやってきたとは申しません。あれこれ考えて足が止まったことも何度かございました。途中で、回れ右して帰ろうかとも思いました。心が沢山のお喋りをしかけてくるのです。「哀れなやつめ。罰を受け場所へなせ行くのだ？」とか、「馬鹿、また立ち止まっているのか。この話が他の男からクレオン様のお耳に入ったら、おまえはいったいどうやって酷い目に遭わずに済むというのだ？」とか。このように心が揺れ動くも

二二〇

のですから、最後までこのろろと時間がかり、短い道もこんなに長くなってしまいました。ですが最後には御前に参る気持ちで勝ちました。たとえ私の申し上げることがこの身の破滅にしかならないとしても、それでも申し上げます。運命で定まっていたこと以外の難儀には遭うまい、そんな希望に縋すがってやって参りましたので。クレオン して、貴様をびくつかせているもの、それは何か？

見張り まずは、私自身のことをお話したたく存じませぬ。この件、私は行なっておりませんし犯人を見てもおりませぬ。ですから私が酷い目に遭うのは正しくはありません。

クレオン 「この件」とやらを壁でぐるりと囲うその狙いは上手いぞ。尋常でないことを告げようとしているのが分かる。

見張り 恐ろしいことを王様にお伝えするのはとてもためらわれるものですから。

クレオン ならば早く話して、逃げ失せると良からう。

見張り では申し上げます。死体を、誰かがたつた今埋めて行きました。つまり、乾いた砂を身体にかけ、必要な供養もなされていきました。

クレオン 何を言っておる。いかなる男がそんな大それたことをしたというのか？

見張り 存じませぬ。鶴嘴をふるった跡も、鍬で掘り返した土もございませんでした。地面は固く乾いていて窪みも車輪の跡もなく、犯人は証拠を残さなかったのです。

二五〇

二四〇

マリヴオー

愛と偶然の戯れ

奥香織 訳

登場人物

オルゴン氏

マリオ

シルヴィア

ドラント

リゼット (シルヴィアの小間使い)

アルルカン (ドラントの召使い)

召使い

舞台はパリ

第一幕

第一場

シルヴィア、リゼット

シルヴィア もう一度言うけど、それは余計な口出しじゃない？

どうして私の気持ちをわかっているみたいに言うの？

リゼット と言われましても、このような場合、お嬢さまのお気持ちはみんなと同じだと思いましたが。お父上である旦那さまは、娘を嫁にやろうと思うがあの子はそれで満足だろうか、少しは喜ぶだろうか、私に聞きますの。私は「はい」とお答えしました。即答でございますわ。それに、本心から「はい」と言わない娘なんて、おそらくこの世でお嬢さまだけですわ。「いいえ」なんて自然じゃありませんもの。

シルヴィア 「いいえ」が自然じゃないですって？ なんて軽率な言い方！ お前には結婚がそんなに魅力的なの？

リゼット それはもう、またまた「はい」でございます。

シルヴィア お黙り。そんな無作法な返事はどこかよそでしてちょうだい。それに、自分勝手に私の心のうちを押し量るなんて、お前のすることじゃないわ。よく覚えておいて。

リゼット 私の心は世間並みにできております。お嬢さまの心だけが他の人とは違うなんて、どうしてお思いになりますの？

シルヴィア お前ときたら、言わせておけば、私のことを変わり者と云いかねないわね。

リゼット もし私がお嬢さまと同じ身分でしたら、どうなるかわかりませんよ。

シルヴィア どうしても私を怒らせたのね、リゼット。

リゼット そんなつもりはございません。でも、正直なところ、お嬢さまが結婚を心待ちにしていると旦那さまにお伝えしたのが、どうしていけないのでございましょうか。

シルヴィア まずね、お前は本当のことを言っていないからよ。私は独身のままでいることがちつとも嫌じゃないわ。

リゼット これはまた奇抜なお考えですこと。

シルヴィア 私が結婚すればさぞ喜ぶだろうなんて、お父さまに思っていただく必要はないわ。なぜって、そうなればお父さまは自信をもって話を進めることになるだろうけど、そんな自信は何の役にも立たないってことになりかねないわ。

リゼット まあ！ お父さまがお決めたになった方と結婚なさらないのですか？

シルヴィア そんなこと、私にわかるはずないでしょ。その人が私にはまったく合わないってこともあるし、それが心配だわ。

リゼット 聞いたところによりますと、相手の方はこのうえない紳士で、スタイルもよく、誰からも好かれていて、美男子で、そのうえ才氣に満ち溢れ、お人柄も申し分ないくらい素晴らしいとか。このうえ何をお望みになりますの？ これ以上に甘美な結婚、うっとりするような結婚を思い描くことができまして？

シルヴィア うっとりするような、ですって！ どうかしてるわ、そんな表現をするなんて！

リゼット　だつて、お嬢さま、これほどの男性がきちんと結婚の申し込みをしてくださるなんて、喜ばしいことですわ。こんな方に言い寄られたら、大抵の娘は正式な手続きをしないで一緒になつてしまいかねませんもの。誰からも好かれて、スタイルもよい、これこそ恋人として最適です。社交的で才気がある、こちらは世間でのお付き合いにうってつけでございます。なんとも、何から何までいいことづくめの殿方、実用的で見た目にも快いすべてが揃つております。

シルヴィア　ええ、お前の人物描写だとそうなるわね。それから、噂でもそうみたいね。でも、それはあくまでも噂よ。私がそういう気持ちを持たないこともあり得るわ。彼は美男子だそうだけど、それはありがた迷惑みたいなものよ。

リゼット　迷惑！　ありがた迷惑ですつて！　なんともおかしなお考えですこと！

シルヴィア　とっても常識的な考えよ。美男子なんて自惚れ屋が多いわ。私、よく知つてるもの。

リゼット　そりゃあ、自惚れ屋はいけません。でも、美男子はいいですわ。

シルヴィア　スタイルもいいそうね、それはまあまあだわ。

リゼット　そうです、それは許してさし上げなくては。

シルヴィア　美男子だとか、いい顔立ちだとか、そんなことはどうだつていいの。そんなの、おまけでくつついているような魅力だもの。

リゼット　まあ！　私が結婚するんでしたら、そのおまけが必需品でございます。

シルヴィア　何言つてるの。結婚という場合、みんなから好かれる

男性よりも、思慮分別がある男性のほうがずっと大事なの。つまり私はね、結婚相手の性格が良ければそれでいいの。でも、これがなかなか見つかるものではないのよ。確かにその方の評判はともいいわ。でも、誰かその方と暮らしてみたことがあつて？

男の人つて、とくに才気がある場合、なかなか正体をあらわさないものじゃない？　お友達と一緒に最高にいい人にみえる方を、私が知らないとしても？　穏やかで、理性的で、快活そのもので、顔つきにいたるまで何から何まで長所ばかりの人よ。あの人は礼儀正しくてとても思慮深そうにみえるつて、みんながエルガストさんのことを言つてたわ。その通りですつてみんな答えてた。私だつてそう答えたわ。あの方の顔つきには少しも偽りはありませんつて。でもね、穏やかで感じのいいこの顔を信用してごらんなさい。五分もすると、暗くて、粗暴で、人付き合ひなんでもまっぴらつていう顔に変わつてしまつて、家中を恐怖で震えあがらせるのよ。エルガストさんは結婚されたけど、奥さまも、子どもたちも、使用人も、いまだにこの顔しか知らないわ。ところがね、よそではどこでも、私たちが知つているあの愛想のいい顔ばかり。あの顔は、外出するときにかぶる仮面にすぎないのよ。

リゼット　二つの顔の使い分けとは、なんと奇妙ですこと！

シルヴィア　レАндルさんだつて、お会いすると気持ちのいい方じゃない？　それが、家では一言もしゃべらず、笑いも怒りもないんですつて。氷のように冷たくて、孤独で、人を寄せつけない魂の持ち主なんだわ。奥さまはご主人の心のうちをご存知ないの。だつて、心の交流なんてまったくくないんですもの。あの奥さまは、書斎から出てきて、食卓について、陰鬱さと冷淡さと退屈さで周りの人たちを沈黙させてしまふ、人形みたいな方と結婚し

たんだわ。まったく愉快な旦那さまじゃない？

リゼット お話を聞くだけでもぞっとしてきます。でも、テルサドルさんなんかはどうなんでしょう？

シルヴィア そう、テルサドルさんよ！ この間、あの方が奥さまをすぐく怒っていらして、そこに私が訪ねて行つたの。使用人が取り次ぐと、両手を広げて、朗らかで、軽快な感じで、私のほうへいらしたわ。このうえなくおかしな会話に興じていたかのようにね。口にも目にも、まだ笑いが残っていたわ。まるでペテン師だわ。これが男性というものよ。あの方という奥さまがお気の毒だなんて、誰が思ってくれるの？ 奥さまは、打ちのめされて、鉛色の顔をして、眼を泣き腫らしていたわ。私だつて、将来、奥さまのようになるかもしれない。あれが私の未来の姿よ。少なくとも、あれと同じ姿になる危険を冒そうとしているんだわ。本当にかわいそうだったわ。リゼット、もし私がお前にかわいそうと思われるようになったら、恐ろしいことね。どう思う？ 夫というのがどういふものなのか、考えてみるといわ。リゼット 夫ですって？ それでも夫は夫ですわ。その言葉でお話を終えられるのは、ようございませんでした。その言葉のおかげで、他の悪い点がすべて帳消しになってしまいますから。

第二場

オルゴン氏、シルヴィア、リゼット

オルゴン氏 やあ、おはよう、シルヴィア。お前にいい知らせを持ってきたんだが、喜んでくれるかな。お前の夫になる人が今日や

つてくる。彼の父親がこの手紙で知らせてきたんだ。返事をしないじゃないか、なんだか悲しそうな顔をして。リゼットはリゼットで眼を伏せているが、これはいったいどういうことだ？ 言つてみなさい、どうしたというんだね？

リゼット 旦那さま、人を震え上がらせる顔つき、凍え死にさせるような別の顔つき、他人を寄せつけない凍りついた魂、それから打ちのめされた顔つきで鉛色の顔に泣きはらした眼をしている女性の肖像。これが、旦那さま、私たちがじつくり考えていることでございます。

オルゴン氏 いったい何だね、そのたわごとは？ 魂だの、肖像だの。説明しなさい、さっぱりわからない。

シルヴィア といいますのは、夫からひどい扱いを受けている女性の不幸について、リゼットと話していましたの。私、先日お会いしたテルサドルさんの奥さまを例に出しました。すっかり打ちのめされていらして。旦那さまに叱られていたんです。それで私、このことについての自分の考えを話していました。

リゼット はい、私たちは、無表情で行ったり来たりする人について話しておりました。夫というものは世間に対しては仮面をかぶつていて、妻に対してはしかめっ面をしているものだ、と申していたところでございます。

オルゴン氏 今の話からすると、結婚が不安でしようがないということだな。ドラントを全然知らないんだから、なおさらのことだ。

リゼット まず、相手は美男子なのですが、それはむしろありがたい迷惑みたいなものでございます。

オルゴン氏 ありがた迷惑だつて！ 何を寝ぼけているんだ、迷惑

などとは。

リゼット 私、教えていただいたことをお話ししたまでです。これはお嬢さまのお説なんです。私はお嬢さまについて勉強しておりますから。

オルゴン氏 まあいい、まあいい、そんなことは問題ではないんだ。さてと、シルヴィア、私がお前をどれほど可愛がっているか知っているだろう。ドラントはお前と結婚するためにやってくる。このあいだ田舎へ出かけた折、ドラントの父親とこの縁談を決めたのだ。彼とは親しくしていて、古くからの友人だ。といつてもそれは、二人が互いに気に入ること、この点に関して互いの気持ちを表明する完全な自由があること、という条件付きでだ。私に気兼ねすることなどない。もしドラントがお前の気に入らなければ、そう言えればいい。彼は帰っていくだけのことだ。もし彼のほうでお前を気に入らなければ、やはり彼は帰っていくまでだ。

リゼット オペラのような愛の二重唱で事が決まるのでございませぬね。「あなたには僕が必要だ、僕もあなたを必要とする。さあ、急いで公証人を！」となるか、あるいは「あなたは僕のことを愛していますか？ いや、僕もあなたを愛してなどいない。さあ、早く馬を！」となるか。

オルゴン氏 私はまだ一度もドラントに会ったことがない。あれの父親のところへ寄ったとき、彼は不在だったのだ。だが、評判から察するに、お前たちが互いに断るようなことはあるまいと思っ

ているよ。
シルヴィア お父さまのご厚意、心からありがとうございます。気兼ねなくとおっしゃってくださいますので、その通りにいたします。

オルゴン氏 そう命じるよ。

シルヴィア あの時、もしできれば、今ちよつと思いついたことがありまして、それをお許しいただけたら、私の気持ちもすっかり落ち着くと思えますの。

オルゴン氏 話してごらん。できそうなことなら認めよう。

シルヴィア できることですね。でも、このことがお父さまのご厚意に甘えずぎていのではないかと心配で。

オルゴン氏 まあ、甘えたらどうだ。人間は優しくすぎるくらいでないと、十分に優しくはなれないものだ。

リゼット そのようなお言葉がでるのは、すべての人間の中でも一番いい人だけですわ。

オルゴン氏 話してごらん、シルヴィア。

シルヴィア ドラントさんは、今日、ここにいらつしやいます。もしも、私だと知られずにあの方にお会いして、少し観察してみることができましたら。リゼットは気が利きますわ、お父さま。少しくらいなら、私の代わりを務めてもらえらると思えます。そして私のほうは、彼女の代わりを務めます。

オルゴン氏 (傍白) 面白い思いつきだ。(普通の声で) お前が言ったことを少し考えさせてくれ。(傍白) 娘の言う通りにさせておくと、ずいぶんおかしなことが起きるに違いない。当人も予期せぬような……。 (普通の声で) よかろう、シルヴィア、変装を許そう。リゼットは、お前の役をこなせる自信はあるかね？

リゼット 私でございませうか。旦那さまは私の身分をご存知でしょうが、このような格好をしましたら、気軽に言い寄ったり失礼な振舞いをしたりなんて、おできになれますでしょうか。殿方を待ち受ける貴婦人ぶりは、ざつとこんな感じでございます。いかが

ですか？ さあ、リゼットらしさが残っておりまして？

オルゴン氏 これは驚いた。現にこの私でも見違えるほどだ。だがもう時間がない。お前の役に応じて身なりを整えに行くがいい。ドラントはいつなんどきやってくるかもしれない。さあ、急いで。家中のものにも伝えておくんだよ。

シルヴィア 私にはエプロンが一つあればいいようなものですわ。リゼット 私のほうは身支度をいたします。髪を整えるのを手伝ってちょうだい、リゼット、仕事には慣れておくものよ。人に仕えるには注意が必要、お願いね。

シルヴィア ご満足のいきますように、お姫さま。さあ、お供いしましょう。

第三場

マリオ、オルゴン氏、シルヴィア

マリオ シルヴィア、おめでとう。いい知らせを聞いたよ。間もなくお前の許婚^{フアンセ}に会えるそうだね。

シルヴィア ええ、お兄さま。でも、今は、こうしてここでお話ししている時間がないの。大切な用事があるんですもの。何のことがお父さまから伺ってちょうだい。それじゃ。

第四場

オルゴン氏、マリオ

オルゴン氏 彼女の邪魔はせずに、マリオ、こつちへきなさい。話をするから。

マリオ 何かまた変わったことでも？

オルゴン氏 これだけはあらかじめ頼んでおくよ。これから話すことは秘密にしてくれ。

マリオ おっしゃる通りに。

オルゴン氏 ドラントは今日やってくるんだが、変装してくるのだ。

マリオ 変装ですって！ 仮面舞踏会にでも出るつもりなんですか？ お父さんは歓迎の舞踏会でも開かれるんですか？

オルゴン氏 まあ、彼の父親の手紙の一節を読むから聞いてくれ。

うむ……「なお、貴殿がどう思われますかは存じませんが、愚息はあることを思いつきました。それが風変わりであることは当人も認めております。しかし動機自体にはうなずけるものがあり、さらにまたそこには細やかな心遣いも働いております。と申しますのも、愚息の願いと、まずは使用人の格好で貴殿宅に赴くことを許していただきたい、そして使用人には主人役を務めさせて

いただきたい、というものです。」

マリオ はっはっは！ それは面白いでしょう。

オルゴン氏 続きを聞いてくれ。「愚息もこの縁組がいかに重大か、十分に承知しております。本人によりますと、ほんの一時の変装によつて多少なりとも花嫁のご性格を理解し、いつそうよくお人柄を知りたい、そのうえで、貴殿と私との間で結びました約束通りの自由意思に基づき、みずから取るべき道を決めたいと希望しております。私といたしましては、大切なお嬢さまについて貴殿よりお話いただきましたことをことごとく信頼しておりますの

第五場

シルヴィア、オルゴン氏、マリオ

で、すべて承知して許してやると言いましたものの、念のため、あらかじめお知らせ申し上げる次第です。もつとも愚息は、貴殿には内密にしてほしいと申し立てましたが。この件につきまして、未来の花嫁に対してどのようにお計らいいたさるか、貴殿のご意向に沿ってご判断いただきたく存じます……」と、このように父親は書いてきた。それだけではない。今度はこうだ。お前の妹のシルヴィアもまたドラントについて不安に思い、彼の秘密は知らぬまま、ここで同じ芝居をやらせてほしいと言おうのだ。それも、ドラントがシルヴィアを観察したいのとちょうど同じく、ドラントを観察するためだ。お前はどうかね。これほど風変わりなことがあるかね？ 目下、お嬢さまと侍女は変装中だ。どうしたらよいかね、マリオ？ お前の妹に知らせてやろうか？ それとも黙ってようか？

マリオ それは、お父さん、このように事が進んでいる以上、二人の邪魔をしたくはありません。それぞれの頭に浮かんだアイディアを尊重してやりたいですね。二人は変装したままで何度も話し合えばいいのです。双方の心が相手の価値を感じられるかどうか、見ることにしましょう。おそらくドラントは、たとえ小間使いの姿をしているにしろ、妹を好きになるでしょう。そうなればシルヴィアにとつても嬉しいことでしょうし。

オルゴン氏 シルヴィアがどんなふうにもこの難局を乗り切っていくのか、少し見てみることにしよう。

マリオ お父さんや僕にとつても面白いことになりますよ。僕は芝居の幕開きに立ち会うことにして、二人をじらしてやりましょう。

シルヴィア ほら、この通りですわ、お父さま。小間使いぶりも悪くありませんでしょう？ お兄さまも、もう何のことだかおわかりの様子ね。私の格好はいかが？

マリオ これはまた、シルヴィア、ドラント君の召使いと同様、僕もつい参ってしまうよ。だがお前は、お嬢さまからドラント君をさらいかねないな。

シルヴィア 正直言つて、私、この格好のまま、あの方に気に入られるのも悪くないと思つていますわ。あの方の理性を屈服させて、私たちを隔てる身分差をしばらくの間忘れさせるのも、まんならじやないわ。私の魅力がそれだけのことをしてくれたら嬉しいでしょうし、たいしたものだわ。それに、ドラントさんがどんな方か知ることもできるでしょうし。彼の召使いが私を好きになつても、ちつとも気にしないわ。まさか私にむかつて恋の告白なんてできるはずないもの。そんな下賤な男には、恋心よりも尊敬の念を起こさせる何が私の顔つきにはあると思うわ。

マリオ まあまあ、落ち着いて、シルヴィア。その下賤な男がお前のお仲間ということになるんだから。

オルゴン氏 そして、きつとお前を好きになつてしまふぞ。シルヴィア それならそれで、彼に好かれるのも無駄ではありませんわ。召使いつていうのは生まれつき無遠慮なもので、そして恋はおしゃべり。私は彼からご主人のことを聞き出すことにしますわ。

召使い 旦那さま。どこかの召使いが参りまして、旦那さまにお目にかかりたいと申しております。荷稼ぎにカバンを一つ持たせております。

オルゴン氏 通しなさい。おそらくドラントの召使いだらう。主人のほうは用事で駅に残ったのだらう。リゼットはどこだ？

シルヴィア リゼットは身支度の最中です。そして、鏡を見ては、ドラントさんを自分に任せるなんて軽はずみだわって言っております。まもなく支度も終わりますわ。

オルゴン氏 静かに。やってきたぞ。

第六場

ドラント (召使いの格好)、オルゴン氏、シルヴィア、マリオ

ドラント オルゴンさまにお目にかかりたいのでございますが。失礼ながら、あなたさまではございませんか？

オルゴン氏 そうだ、私だ。

ドラント 旦那さま、私どものことはすでにご承知のことと存じます。私はドラントさまにお任せしております。主人はあとから参上いたしますが、とにかく一足先にお伺いしてご挨拶申し上げます。ようにと言いつかっております。主人もいずれあとから参りまして、ご挨拶を申し上げるからとのことでございました。

オルゴン氏 使いの者の口上としては鮮やかなものだ。リゼット、この若者をどう思うかね？

シルヴィア まあ、旦那さま、私、ようこそ、と申しますわ。それから、なかなか見込みがありそうな人だと思えます。

ドラント どうもご親切に。できる限りうまくやるように努めます。

マリオ 少なくとも男ぶりはなかなかのもの。お前の心にしっかり紐をつけておかねばな、リゼット。

シルヴィア 私の心だなんて、ご冗談ばかり。

ドラント お気を悪くなさらないでください、お嬢さん。こちらの旦那さまがおっしゃることを真に受けたりはしませんから。

シルヴィア その謙遜のお言葉がいただければ結構ですわ。ずっとその調子でお願いしますわ。

マリオ 結構、結構。ところで、この男がお前のことをお嬢さんと呼ぶのは、いささか堅苦しいように思うが。お前たちのような間柄では、挨拶の仕方それほど真面目くさってはおかしい。それではいつまでたつても打ち解けられないぞ。さあ、もっと気楽に応待したらどうだ。お前の名はリゼット、そして君のほうは、何という名だね？

ドラント ブルギニオンと申します、旦那さま。

シルヴィア それなら、ブルギニオンと呼びますわ！

ドラント ではこちらにも、リゼットと言わせてもらいましょう。とは言いましても、あなたにご用があれば、なんなりとどうぞ。

マリオ あなたにご用があれば、なんなりとどうぞ、だど！ それも召使いの言葉とは思えん。お前、用があればなんでも言いな、でなくちゃ。

オルゴン氏 あつはつはつは！

シルヴィア (小声でマリオに) お兄さま、私をからかっていらつしやるのね。

ドラント お前、と呼ぶことにつきましては、リゼット次第にいた

します。

シルヴィア あんたの好きなようにしたらいいわ、ブルギニオン。さあ、これで打ち解けたわ。旦那さまたちのお慰みにもなるみたいだし。

ドラント ありがとう、リゼット。さつそくお前の厚意に應えるよ。

オルゴン氏 二人とも、頑張りたまえ。好き合つてみたつて構わないんだ、もう遠慮は捨てたんだから。

マリオ おやおや、落ちついてください。好き合つていうのはまた別の問題です。お父さんはご存知ないでしょうが、実は、かくいう僕も、リゼットの心を自分のものにならなうと思つて居るので。今のところリゼットの心は僕に冷たいのですけど、だからといつてブルギニオンに縄張りを荒らされるのは困ります。

シルヴィア まあ、若旦那さまはこの人をそんな調子で扱われますの？ でしたら私、ブルギニオンに好いてもらいたいくらいですわ。

ドラント 好いてもらいたいだなんて言うもんじゃないよ、リゼット。美しいお前のことだ、命令されなくてもちゃんと尽くすよ。

マリオ ブルギニオン君、その上品な口説き文句はどこかで盗んできましたね。

ドラント おつしやる通りでございます、旦那さま。これを得ましたのは、彼女の眼の中でございます。

マリオ 黙りたまえ。それでは、なおいけない。そんなに才気を持つことは禁止するよ。

シルヴィア なにも、若旦那さまにご迷惑がかかるわけではございません。私の眼の中に見つけたつていうなら、取らせておけばよ

ろしいんですわ。

オルゴン氏 マリオ、お前の負けだ。われわれは引き下がるとしよう。まもなくドラント君がやってくる。娘に知らせに行こう。それからリゼット、この若者にご主人の部屋を見せてやるんだ。では失礼、ブルギニオン。

ドラント 旦那さま、かさねがさね恐れ入ります。

第七場

シルヴィア、ドラント

シルヴィア (傍白) 二人してお芝居をしてるんだわ。でも、いいわ。なんでも利用してしまおう。あの若者は機転がきくもの。それに、こんな男性を自分のものにする小間使いだったら悪くない。どうせ私に言い寄るんでしようけど、言わせておきましょう、何か役に立つことがあるかもしれないから。

ドラント (傍白) この娘には驚いた。これほどの顔つきをしたお付きを連れていけば、どんな女性だつて社交界で堂々としてられるだろう。近づきになつておこう……。 (普通の声で) 親しくなつて遠慮は無用になつたことだし、なありゼット、お前のご主人はお前にふさわしい方なのかい？ お前ほどの小間使いを置くなんて、ずいぶん自信のある人とみえる。

シルヴィア ブルギニオン、そんなことを聞いてくるところをみると、お決まりの口説き文句を言うつもりね。そうじゃない？

ドラント いや、そんなつもりで来たんじゃない。本当だ。俺は召使の風情だが、小間使いと親密な関係になつたことは一度もな

い。奉公人根性が嫌いなんだ。だが、お前は別だ。なんと、まったく！ 圧倒されるばかりだ。臆病になってしまったくらいだ。俺は無遠慮なたちだが、それもお前とじゃどうもじっくりいかない。帽子を脱ぎたくてしょうがない。お前なんて呼ぶのも、おかしな感じがする。お前は笑うかもしれないが、もつと丁寧に扱いたいんだ。お前はいつたいたいというお付きなんだ、高貴なお嬢さまみたいな素振りをして。

シルヴィア あら、あなたがあたしを見て言ってるせりふときたら、他の召使いたちがあたしを見て言うせりふと同じだわ。

ドラント いや、俺は、どんなご主人もみんな同じように言ってると聞いても驚かないね。

シルヴィア 上手なお言葉ね。でも、もう一度言うけど、あたしはあなたと同じようなお仕着せを着た人たちのお世辞を聞く気はないの。

ドラント というと、俺の身なりが気に入らないというのか？

シルヴィア いいえ、ブルギニョン、愛だの恋だのは置いておいて、いいお友達でいましょう。

ドラント たったそれだけか！ お前のちよつとした協定とやらは、守り難い二つの条項からできているじゃないか。

シルヴィア (傍白) これで召使いだなんて、なんて男かしら！ (普通の声で) でもやつぱりこの協定は守ってもらわないと。あたしは身分の高い人として結婚しないだろうって予言されたの。それ以来、そうでない人たちの言葉には耳を貸さないうって誓ったの。

ドラント ほほう、そいつは面白い。お前が男について誓ったことを、俺は女について誓ったんだ。俺は、身分のあるお嬢さんでなければ決して真面目に愛さないと誓ったんだ。

シルヴィア それじゃあ、その道から外れないことね。

ドラント 思っているほど外れちゃいけないかもしれない。お前とても上品だし、ときには、それとは知らずに身分ある娘だということもあるじゃないか。

シルヴィア あらまあ、お褒めにあずかってお礼を言いたいところだけど、それじゃ母の立つ瀬がないじゃないの。

ドラント それなら、俺のおふくろのことでやり返してくれてもいいんだぜ。俺の顔を見てそれだけの価値があると思うなら。

シルヴィア (傍白) それだけの価値はあるわ。(普通の声で) でもそんなこと問題じゃないわ。おふざけはこのくらいで終わり。あたしの未来の夫は身分がある人と決まっています、譲歩はしないわよ。

ドラント いや、まったく！ もし俺がその相手だったら、さぞかし予言に悩まされるだろうよ。真実を確かめてみるのが怖いだろうよ。俺は星占いはまったく信じないが、お前の顔は大いに信用しているんだ。

シルヴィア (傍白) まだやめないわ。(普通の声で) もうやめたら？ 予言がなんだっていうの？ あなたは対象外だっていうの。

ドラント 俺がお前を好きにならないっていう予言もないわけだ。シルヴィア それはそうだけど、あなたがいくらどうしてもだめ、っていう予言なのよ。保証するわ。

ドラント それで結構、リゼット。そのつれなきがお前には実によく似合う。俺はそれでやつつけられているが、そんなお前を見るのもいい。最初に会ったときにそう願ったほどだから。これだけがお前に欠けてたんだ。それがお前に備わったんだから、俺に

は損になつてもよしとしなきゃな。

シルヴィア（傍白） 本当に、この若者には驚かされる。こつちがどう出てもこれじゃあ……。〔普通の声で〕ねえ、あんたはいつたい誰なの？ あたしにそんな風に話すなんて。

ドラント まつとうな人間の息子さ、金持ちじゃなかったが。

シルヴィア ねえ、あんたの身分がもつとましになるように、心から祈つてるわ。力になつてあげたいくらいよ。金運に恵まれなかったのね。

ドラント いやいや、お金よりも恋の運に恵まれていない。俺としては、世界中の財宝をみんなもらうよりも、お前の心が欲しいと言わせてもらうほうがありがたい。

シルヴィア（傍白） あらまあ、またお決まりの会話に戻つてしまつたわ。（普通の声で）ブルギニョン、あんたが聞かせてくれる話に腹はたてないけど、お願いだから少し話題を変えましょう。あんたのご主人の話をしたいわ。あたしに愛だの恋だの話さなくて済むでしょうし。

ドラント お前こそ、俺を惑わせないで済みそうなんだ。

シルヴィア まあ！ 怒るわよ、あたしをいらいらさせないで。もう一度言うけど、恋の話はやめてちょうだい。

ドラント それじゃあ、その顔をとつてもらいたい。

シルヴィア（傍白） どうやらこの男、私に気晴らしでもさせようとしてるのね。（普通の声で）それじゃあ、ブルギニョン、やめる気はないのね。あたしをあつちへ行かせるつもり？（傍白）もつと早く行つてしまふべきだつたわ。

ドラント ちょっと待つた、リゼット、俺のほうも別の話をしたかつたんだが、何のことだか忘れてしまつた。

シルヴィア あたしのほうでも、あんたに話すことがあつたのよ。でも、あんたのおかげで何だかすつかり忘れてしまつたわ。

ドラント 思い出した、お前のご主人はお前にふさわしいのかと尋ねていたんだ。

シルヴィア あんた、回り道をして元に戻る気ね。さようなら。

ドラント いや、違つたら、リゼット、今度は俺のご主人さまにだけ関わることだ。

シルヴィア それなら、まあいいわ。あたしもあんたのご主人について話したかつたの。どんな方なのか、こつそり言つてくれるわね。あんたの勤めぶりからすると、いい方なんだろうけど。あんたが仕えているんだから、立派な方に違いないわ。

ドラント 今のお前の言葉にお礼を言うぐらいいは許してくれるだろうな。

シルヴィア うつかり言つてしまつたことだから、気にしないでちょうだい。

ドラント そんな返事をするから、またぼうつとなつてしまふ。好きなようにするがいいさ、俺は逆らわないから。この世で一番可愛らしい人のとりこになるなんて、まつたくついていない男だよ。

シルヴィア そして、あたしのほうは、いったいどうしてあんたの言うことを聞いてあげてるのかしら。まつたく、本当に奇妙なことだわ。

ドラント その通り。こんな巡り合わせは他に例がないな。

シルヴィア（傍白） あんなことまで言われても、私はまだここを離れてない。ここを離れようともせず、まだこうしている。返事までしてる！ まつたく、冗談にもほどがあるわ。（普通の声

ゴ
ル
ド
ー
ニ

二
人
の
主
人
を
一
度
に
持
つ
と

鈴
木
国
男
訳

登場人物

舞台はヴェネツィア

パンタローネ・デ・ピソニョージ

クラリーチェ（その娘）

ドットーレ・ロンバルディ

シルヴィオ（その息子）

ベアトリーチェ（トリノ人 男装しフェデリーゴ・ラスポーニ
と名乗る）

フロリンド・アレトゥージ（その恋人 トリノ人）

ブリゲツラ（ホテルの主人）

ズメラルディーナ（クラリーチェの小間使い）

トゥルツファルディーノ（ベアトリーチェの さらにフロリンド
の召使い）

ホテルのボーイ長（台詞あり）

パンタローネの召使い（台詞あり）

二人のボーター（台詞あり）

ホテルのボーイたち（台詞なし）

第一幕

第一場

パンタローネの家の一室

パンタローネ ドットローレ クラリーチェ シルヴィオ プリ
ゲッタ スメラルディーナ パンタローネの召使

シルヴィオ さあ、僕の右手を。そして、僕の心も全部一緒に。

(クラリーチェに手を差し出す)

パンタローネ さあ、恥ずかしがらずに、お前の手も。そうすれば、お前たちは婚約者。すぐにも結婚だ。(クラリーチェに)

クラリーチェ はい、いとしいシルヴィオ、私の右手を。あなたの妻になると誓います。

シルヴィオ、僕も、君の夫になると誓います。(互いに手を取る)

ドットローレ 大変結構。これで婚約成立。もう後戻りはなしだ。

スメラルディーナ いいわあ。あたしもこうなれたらなあ。(傍白)

パンタローネ 君たちは、わたしの娘クラリーチェと、ロンバルディ先生の御子息シルヴィオ君との婚約の証人ということですよ。

(プリゲッタと召使に)

プリゲッタ はい、旦那様。こんな名誉な役を仰せつかり、ありが

とうございます。(パンタローネに)

パンタローネ そうとも。わたしは君の結婚の証人、君はうちの娘の結婚の証人というわけだ。あえて人に頼んだり、親戚を呼んだりしなかったのは、先生もわたしも大袈裟なことが嫌いなたちです。身内だけで楽しく食事でもして、余計な気遣いはなしだ。どうだい、おまえたちもそう思わんか。(クラリーチェとシルヴィオに)

シルヴィオ 僕は、いとしい人と一緒になら、何もいりません。スメラルディーナ (ほんと、これ以上の御馳走はないわ。)

ドットローレ うちの息子は見栄なんぞ張りません。心が優しくて、お宅のお嬢さんのことしか考えておらんのです。

パンタローネ 思えば、この結婚は天の配剤というべきかも知れませんが。もとはと言えば、娘はトリリーノにいたうちの取引相手のフェデリーゴ・ラスポーニと婚約していたのだから、彼が死ななかつたら、婚殿の出番はなかつたわけだ。

シルヴィオ 本当に、僕は運がよかった。クラリーチェがそう思うかどうか知りませんが。

クラリーチェ シルヴィオだったら、ひどいわ。あなたが好きだって知ってるくせに。それはお父様のお言いつけなら、あのトリリーノ人と結婚したかもしれないけれど、心はいつでもあなたのものよ。

ドットローレ まったく、神様は、お決めたことごとを、思いもかけぬ形で実現させるものだ。そのフェデリーゴ・ラスポーニはどうして死んだんですか？(パンタローネに)

パンタローネ 気の毒に！ 妹のことが原因で、夜中に殺されたんです……よくわからんが、一突きでお陀仏だったとか。

ブリゲッタ それはトリノーで起こったんですか。(パンタローネに)

パンタローネ トリノーで。

ブリゲッタ ああ、お気の毒な。何とも残念なことで。

パンタローネ フェデリーゴ・ラスポーニさんを知ってたのかね。

(ブリゲッタに)

ブリゲッタ もちろん存じ上げておりました。トリノーには三年おりました、妹さんのことも知っております。利発で活発なお嬢さんで、男のような格好をして馬に乗っていたもんです。お兄さんも、それは可愛がっておいで。まさかそんなことになることは!

パンタローネ 不幸はいつ起こるかわからないものだよ。さあ、もう暗い話はやめよう。折り入って頼みたいんだが、君は料理が得意だから、何かうまいものをこしらえてくれないか。

ブリゲッタ お安い御用で。自慢じゃありませんが、わたしのホテルでは、どなた様も御満足なさって、どこの店よりもうまいとお

っしゃいます。腕によりをかけて御用意いたしましたよ。

パンタローネ 結構。パンを浸せるような汁気の多いものもいいな。(ノックの音をきいて) 誰か来た。見てきなさい、ズメラルディーナ。

ズメラルディーナ たいだいま。(退場し、やがて戻る)

クラリーチェ お父様、それではこれで。

パンタローネ 待ちなさい。誰が来たか聞いてみよう。

ズメラルディーナ (戻る) 旦那様、遠方から来た方の召使いで、口上があるそうです。わたしには何も申しません。御主人様と話したいと言って。

パンタローネ 通しなさい。何の用か聞いてみよう。

ズメラルディーナ かしこまりました。(退場)

クラリーチェ わたしは失礼します。

パンタローネ どこへ行く?

クラリーチェ もちろん、自分の部屋ですわ。

パンタローネ だめだめ、ここにいなさい。(まだ二人きりにさせるわけにはいきませんぞ。)(ドットーレにささやく)

ドットーレ (それが賢明というものです。)(パンタローネにささやく)

第二場

トウルツファルディーノ ズメラルディーナ パンタローネ
ドットーレ クラリーチェ シルヴィオ ブリゲッタ パンタ
ローネの召使!

トウルツファルディーノ 旦那様方に、謹んで御挨拶申し上げます。おお、何とるわしきお顔おれ! おお、何とるわしき御
歓談!

パンタローネ どなたかな? 御用は?

トウルツファルディーノ こちらの上品な御婦人は、どなた様
で?(クラリーチェをさしてパンタローネに)

パンタローネ 私の娘だが。

トウルツファルディーノ それはおめでたいことで。

ズメラルディーナ 花嫁さんなのよ。(トウルツファルディーノに)

トウルツファルデイーノ　ますますもっておめでたい。で、あなたはどなた？（ズメラルデイーナに）

ズメラルデイーナ　わたしは小間使いよ。

トウルツファルデイーノ　こりやまた結構。

パンタローネ　さあさあ、挨拶はそのくらいに。御用は何ですか？

トウルツファルデイーノ　まあまあ、落ち着いて。一度に三つの質問なんて、わたしには無理です。

パンタローネ　この人、ちょっと頭が弱いのかしら。（ドットーレにささやく）

ドットーレ　ふざけてるんじゃないですか。（パンタローネにささやく）

トウルツファルデイーノ　あなたも花嫁さん？（ズメラルデイーナに）

ズメラルデイーナ　まあ！（溜息をつけて）違います。

パンタローネ　あなたが誰だか言わないのなら、帰ってもらいますよ。

トウルツファルデイーノ　わたしが誰だかって言うんなら、話は早い。わたしの主人の召使いです。（パンタローネに）ところで今の話だが。（ズメラルデイーナの方を向いて）

パンタローネ　で、あなたの御主人というのは？

トウルツファルデイーノ　遠くから来た人で、あなたに会いたいて言ってる人。（パンタローネに）その嫁さんでことで、ちょっと話したいんだけど。（ズメラルデイーナに同様）

パンタローネ　で、その人は誰？　何という名前？

トウルツファルデイーノ　ああ、そうなると話は長い。トリーノの

フェデリーゴ・ラスポーニで、わたしの御主人様で、あなたに御挨拶をしたくて、わざわざやって来て、いま下にいて、わたしを

使いに寄越して、ここに来たいと言って、わたしの返事待ってます。これでいいですか？　他には？（パンタローネに。全員が

驚いた様子）さて、我々の……（ズメラルデイーナに同様）

パンタローネ　ちよつとこつちに來なさい。今、何て言った？

トウルツファルデイーノ　私が誰かとおっしゃるのなら、トウルツファルデイーノ・バトツキオ、ベルガモの在の者です。

パンタローネ　あなたが誰かなんてどうでもいい。その御主人とやらが誰なのか、もう一度言ってくれますか。何かの間違いじゃないかと思うんだが。

トウルツファルデイーノ　年のせいで耳が遠いらしい。私の御主人様は、トリーノのフェデリーゴ・ラスポーニです。

パンタローネ　いい加減にしなさい。頭がおかしいんじゃないか。トリーノのフェデリーゴ・ラスポーニさんは、死んだんだ。

トウルツファルデイーノ　死んだ？

パンタローネ　そう、お気の毒だが、確かに死んだんだ。

トウルツファルデイーノ　あれま！　御主人様が死んだって？

今、下でピンピンしてたのに！（傍白）ほんとに死んだっていうんですか？

パンタローネ　死んだと断言してもいい。

ドットーレ　そう、死んだ、疑いの余地はない。

トウルツファルデイーノ　（かわいそうな御主人様、事故にでも遭ったのかな）ではごめんください。（立ち去ろうとする）

パンタローネ　もう用はないのかね？

トウルツファルデイーノ　死んだとあつちや、それまでです。（ほ

んとなのか確かめなくちゃ。(傍白、退場、すぐに戻る)

パンタローネ あいつは何者だろう。頭がおかしいのか、何かたくさんんでいるのか。

ドットーレ さて、そのどちらもあり得ますな。

ブリゲッタ ただの単細胞ですよ。ベルガモの在に、そんな知恵の回る者はおりません。

ズメラルディーナ 見た目も悪くないわ。(色は黒いけど、好みだわ。)(傍白)

パンタローネ だが、フェデリーゴについてのたわごとは？

クラリーチェ その人が、本当にここへ来たら、私にとつては最悪だわ。

パンタローネ 何を馬鹿な。おまえだってあの手紙を見ただろう？(クラリーチェに)

シルヴィオ もし彼が生きていて、ここへ来たとしても、もう遅いですよ。

トゥルツファルディーノ (戻る) ひどいじゃありませんか。人をこんな風に扱うもんじゃない。よ者だからって、こんな風にたぶらかすもんじゃない。紳士のふるまいとも思えません。はつきりさせてもらいますよ。

パンタローネ (やっぱり頭がおかしいんじゃないだろうか。) どうしました？ 何があつたというんです？

トゥルツファルディーノ まだ、フェデリーゴ・ラスポーニさんが死んだと言ひ張るんですか？

パンタローネ そうでしょ？

トゥルツファルディーノ そうでしょって、今ここにピンピンしていて、御挨拶申し上げたいと言つておられますよ。

パンタローネ フェデリーゴ？

トゥルツファルディーノ フェデリーゴ。

パンタローネ ラスポーニ？

トゥルツファルディーノ ラスポーニ。

パンタローネ トリーノの？

トゥルツファルディーノ トリーノの。

パンタローネ 病院で診てもらいなさい。

トゥルツファルディーノ 何だって！ わたしを気遣い呼ばわりするんですか。あの人は今にもこの場にやってきましたよ。そして

ら、ただじゃ済みませんからね。

パンタローネ 言わせておけば、つけあがりおつて。

ドットーレ まあまあ、パンタローネさん、何はともあれ、そのフェデリーゴ・ラスポーニとやらを、求させてみようじゃありませんか。

パンタローネ よかろう、そのよみがえった死人を呼んで来い。

トゥルツファルディーノ 死人がよみがえろうが何しようが、わたしの知つたことじゃありません。でも、あの人はちゃんと生きているんですから、その目でとくと御覧なさい。今呼んで来ますから。そうすりゃあ、わたしの様なベルガモ生まれの正直者を、こんな風に扱うもんじゃないってことが、わかるでしょうよ。(パンタローネに、怒って) ねえ君、後でゆっくり話そうね。

(ズメラルディーナに、退場)

クラリーチェ (シルヴィオ、わたし怖いわ。)(シルヴィオにささやく)

シルヴィオ (心配ない。何があろうと、君は僕のものだ。)(クラリーチェにささやく)

クラリーチェ (シルヴィオ、わたし怖いわ。)(シルヴィオにささやく)

ドットローレ これで真実が明らかになるわけだ。

パンタローネ おおかたどこかのならず者が、因縁をつけようともいうんでしよう。

ブリゲッタ 旦那様、さつき申しましたように、わたしはフェデリーゴさんを知っていますから、見ればすぐにわかります。

ズメラルディーナ (でも、あの黒ちゃん、嘘つきには見えなかつたけど。もしかして、わたしのこと……) ごめんくださいまし。(退場)

第三場

男装してフェデリーゴと名乗るベアトリーチェ パンタローネ
ドットローレ クラリーチェ シルヴィオ ブリゲッタ パンタ
ローネの召使

ベアトリーチェ パンタローネさん、お手紙では大変に丁重でしたが、この扱いはどういふことでしょうか。召使いをやって口上を述べさせたのに、半時間というものの、外で待ちぼうけを食わせるとは。

パンタローネ 申し訳……いや、あなた一体どなたです？

ベアトリーチェ トリーノのフェデリーゴ・ラスポーニでございませう。(一同驚きのしぐさ)

ブリゲッタ (こりや、どういうわけだ。これはフェデリーゴじゃない、妹のベアトリーチェだ。この成り行きは見極めなければ)。(傍白)

パンタローネ これは驚きました……御無事で何よりと言いたい

が、何しろ大変な知らせを受けていたもので。(まだとても信じられん。)(ドットローレにささやく)

ベアトリーチェ わかっております。わたしが喧嘩で殺されたというのでしよう。幸い軽い怪我で済み、回復するとすぐにヴェネツィアに向かったのです。前々からの取り決めでしたから。

パンタローネ 何と申したらよいか。お見受けしたところ、きちんとした方のようなが。しかし、わたしもフェデリーゴさんが亡くなったという確かな情報を得ておりまして……そうでないという証拠でもない。

ベアトリーチェ お疑いはごもつともです。身の証しを立てましょう。ここに、あなたの取引先からの書状が四通ございます。そのうちの一通は、取引銀行の支配人のものです。これらのサインをお確かめになれば、私が本人であることはおわかりのはずです。(パンタローネに四通の手紙を渡し、パンタローネはそれを読む)

クラリーチェ (ああシルヴィオ、どうしましょう。)(シルヴィオにささやく)

シルヴィオ (命に代えても、君を守る。)(クラリーチェにささやく)

ベアトリーチェ (あ、ブリゲッタだ！ 何で彼がここにいるんだろう。わたしの正体がばれてしまう。何とかしなければ。)(ブリゲッタに気付いて、傍白) これはこれは、お久しぶり。(大声でブリゲッタに)

ブリゲッタ はい、旦那様、トリーノにおりました、ブリゲッタ。カヴィッキオでございます。

ベアトリーチェ そうでした。(ブリゲッタにさらに近づき) ヴェ

ネツィアでは何をなさつておいでですか？（お願い、黙つていて。）（ブリゲツラにささやく）

ブリゲツラ（御心配なく。）（ベアトリーチェにささやく）ホテルをやつております。（大声でベアトリーチェに）

ベアトリーチェ それはそれは。これも何かの御縁ですから、お宅に泊めて頂きましょう。

ブリゲツラ ありがとうございます。（何か裏があるな。）（傍白）

パンタローネ なるほど。たしかにこの手紙はフェデリーゴ・ラスポーニさん宛のものだし、これをお持ちということは、ここに書いてある通り、あなたは……

ベアトリーチェ まだお疑いのようにでしたら、ここにいるブリゲツラさんが、私が本人であると証明してくれるでしょう。（十ドツピアあげる。）（ブリゲツラにささやく）

ブリゲツラ もちろん、こちらはフェデリーゴ・ラスポーニさんでございますとも。（みすみす十ドツピア貰わない手はないよ。）

（傍白）

パンタローネ 手紙に加えて、親戚同様のブリゲツラ君が保証してくれるなら、何の心配もありません。疑つたりしてすみませんでしたな。

クラリーチェ お父様、じゃやつぱりこの方はフェデリーゴ・ラスポーニさんなの？

パンタローネ そうとも。

クラリーチェ（どうしましょう。わたしたち、どうなつてしまふの？）（シルヴィオにささやく）

シルヴィオ（心配するなつて。僕はぜつたい君を離さないから。）（クラリーチェにささやく）

パンタローネ（よりによつて今現われるとはね。）（ドットーレにささやく）

ドットーレ（二寸先は聞。）（パンタローネに）

ベアトリーチェ パンタローネさん、こちらのお嬢さんは？（クラリーチェを指して）

パンタローネ 娘のクラリーチェです。

ベアトリーチェ つまり、わたしの婚約者ですね？

パンタローネ そう、そうです。（こりや面倒なことになるりそうだ。）（傍白）

ベアトリーチェ お嬢さん、御挨拶させて下さい。（クラリーチェに）

クラリーチェ はじめまして。（つんとして）

ベアトリーチェ ずいぶんとそつけない御様子ですな。（パンタローネに）

パンタローネ 生まれつき内気なたちで。

ベアトリーチェ で、あの方は、御親戚か何かですか？（パンタローネに、シルヴィオを指して）

パンタローネ あ、はい、わたしの甥っ子です。

シルヴィオ いいえ、甥っ子なんかじゃありません、私はクラリーチェさんの婚約者です。（ベアトリーチェに）

ドットーレ（そうだ、しつかりしろ。はつきり言つてやるんだ。だが、焦つちやいかんぞ。）（シルヴィオにささやく）

ベアトリーチェ 何！クラリーチェさんの婚約者だつて？ 彼女はわたしのものじゃないのか？

パンタローネ まあまあ。ちゃんとお話します。あのねえフェデリーゴさん、あなたが亡くなつたとはばかり思つていたので、娘はシ

ルヴィオ君にやろうとしたんですよ。それは何の問題もないですよ。だけどあなたはギリギリで間に合った。あなたさえよかつたら、クラリーチエはあなたのものだ。私は約束を守ります。シルヴィオ君、気の毒だが見ての通りだ。悪く思わんでくれ。

シルヴィオ　でも、フェデリーゴさんは、他の男の手を取った女性を嫁に貰おうなんて思わないでしょう。

ベアトリーチエ　わたしは、そんなにデリケートではありません。喜んで貰いますよ。(ちよつとからかつてやりましょう。)(傍白)

ドットローレ　(何と今どきの婚殿だ！やるじゃないか。)(傍白)
ベアトリーチエ　クラリーチエさんは、私の手を拒みはしないでしよう。

シルヴィオ　いや、あなたは来るのが遅すぎたのです。クラリーチエさんは、わたしのものです。あなたに渡したりはしませんよ。もしパンタローネさんが、わたしを侮辱したら、ただではおきません。クラリーチエさんを欲しいという者には、この剣が相手になります。(退場)

ドットローレ　(そうだ、やれやれ！)(傍白)
ベアトリーチエ　(あらあら、こんなことで死んだらたまらないわ。)(傍白)

ドットローレ　卒爾ながら、あなたは時を失したのです。クラリーチエさんは、我が息子と婚姻の義務がある。法的にも明白な優先権があるのです。(退場)

ベアトリーチエ　あなたは何もおっしゃらないのですか？(クラリーチエに)
クラリーチエ　申しますわ、あなたはわたしを苦しめるためにいら

したのよ。(退場)

第四場

パンタローネ　ベアトリーチエ　ブリゲツラ　後にパンタローネの召使

パンタローネ　失礼だぞ、何ということをして！(クラリーチエの後を追おうとする)

ベアトリーチエ　お待ち下さい、パンタローネさん、無理ありません。あまり厳しくしないで下さい。いずれ、わたしのこともわかつてくれるはずですよ。今のうちに、商売の話を片付けてしましましょう。私がヴェネツィアに来たのは、それもあつてのことですから。

パンタローネ　勘定はすべて整っております。当座預金を見て頂くと、かなりの残高がありますから、いつでも清算致します。

ベアトリーチエ　後ほど改めてゆつくり伺います。よろしければ、まずブリゲツラと共に出かけて、差し迫った細かい用事をいくつか片付けてしまいたいのです。彼は土地勘がありますから、手早く済ませてくれるでしょう。

パンタローネ　どうぞ御随意に。必要なものがあれば、何なりと。ベアトリーチエ　少々現金を用立てて頂けると助かります。為替で損をしたくないので、あまり持って来なかつたのです。

パンタローネ　お安い御用です。今、会計係がおりませんので、戻つたらすぐに宿までお届けします。うちの身内のブリゲツラ君の所にお泊りですか？

ベアトリーチェ もちろん、そのつもりです。後ほど私の召使いを
寄越します。何でもちゃんとやってくれる男ですから。

パンタローネ 結構です。仰せの通りに致します。御無礼のお
詫びに、我が家にお泊り下さるなら、大歓迎ですが。

ベアトリーチェ 今日のところは、お気持だけで。いづれ改めて御
厄介になります。

パンタローネ では、お待ちしております。

召使い 旦那様、お目にかかりたいという方が。(パンタローネ
に)

パンタローネ 誰だね？

召使い あの……あちらに……(ちよっとトラブルが。) (パンタロ
ーネにささやく)

パンタローネ すぐに行く。ちよつと失礼致します。お見送りもせ
ず、申し訳ありません。ブリゲッタ君、よろしく頼むよ。

ベアトリーチェ どうぞお気遣いなく。
パンタローネ それでは、ごめんくださいまし。(面倒なことにな
らなきやいいが。)(傍白、退場)

第五場

ベアトリーチェ ブリゲッタ

ブリゲッタ ベアトリーチェさん、それにしても……

ベアトリーチェ まあ落ち着いて。お願いだから私のことは秘密に
してね。兄さんは死んだの。殺されたのよ。それもフロリンド・
アレトゥージの手で。他の人がやったにしても原因は彼よ。フロ

リンドが私を愛していて、兄さんがそれを快く思っていないか
のは知っているでしょう。争いになって、詳しいことはわからな
いけど、兄さんは死に、フロリンドは官憲を恐れて逃亡した。わ
たしに別れも告げずに。もちろん兄が死んだことは悲しいわ。ど
れだけ泣いたか知れない。でも、今となってはどうしようもない
でしょう。フロリンドを失うことの方が辛い。彼がヴェネツィ
アに向かったことを知って、後を追うことに決めたのよ。兄の服
を着て、証拠となる手紙を持って、彼に会えるかと思ってここに
着いたというわけ。パンタローネさんがわたしをフェデリーゴだ
と信じてくれたのは、手紙もあるけど、やっぱりあなたが証明し
てくれたからよ。取引の清算をして、お金を引き出せば、フロ
リンドが必要な時に役立てることもできるでしょう。愛のために、
行ける所まで行ってみるつもりよ。ねえ、ブリゲッタ、どうかわ
たしを助けてちょうだい。十分にお礼はするから。

ブリゲッタ すべて承知しました。ただ、パンタローネさんがわた
しを信じてお金を払い、後になって騙されたなんてことになるの
は困ります。

ベアトリーチェ 騙されたなんて。兄が死んだ以上、わたしが相続
人じゃないの？

ブリゲッタ その通りです。でも、それなら何でちゃんと名乗らな
いのですか？

ベアトリーチェ そんなことしたら、すべては台なしよ。パンタロ
ーネは後見人面して、みんながわたしに口を出さずでしょう。それ
はごめんだわ。少しの間でいいから自由にやりたいの。いいでし
ょう。そのうち何とかなるわよ。

ブリゲッタ まったく、あなたはいつだって個性的でしたね。いい

ピランデッロ

作者を探す六人の登場人物

大崎さやの
訳

登場人物

父親

母親

継娘

息子

少年

女兒（この最後の二人は口を利かない）

（以上に加えて、呼び出された）マダム・パーチエ

劇団の俳優たち

監督兼座長

主演女優

主演男優

助演女優

若手女優

若手男優

その他の男優と女優

舞台監督

ブロンプター

小道具係

大道具係

座長秘書

劇場案内係

舞台装置係と裏方たち

昼間、台詞劇用の劇場の舞台で

注 この喜劇には幕の転換も場の転換もない。上演は監督兼座長と父親が筋書きの打ち合わせをし、俳優たちが舞台を空にする際に、幕を下ろすことのないまま一度中断される。大道具係が誤って幕を下ろした際、二度目の中断となる。

幕が上がるが、公演のない昼の時間のように、舞台袖の垂れ幕も装置もなく、舞台が薄暗くからっぽなのに、客席に入った観客は気づくだろう。これは最初に、上演準備が整っていないという印象を与えるためである。

舞台の上手と下手のそれぞれに、客席と舞台を結ぶ階段がかかっている。

舞台上には、プロンプター・ボックスのカバーが、ボックスの穴の脇に置かれている。

舞台前方には、監督兼座長用の小さな机と観客の方に背もたれを向けた肘掛け椅子。

他に二つの小机——一つは大きめで、一つは小さめの——と、その周りに多くの椅子が、試演で必要な時いつでも使えるように、舞台前方に出してある。

他にも俳優たちのための椅子が左右あちこちに置かれ、舞台奥の片側にほとんど隠れるようにピアノが置かれている。

客席のライトが消され、青い仕事着を着て道具袋をベルトに下げた大道具係が、舞台の出入り口から入ってくる。彼は舞台奥の片隅から、装置用の板を何枚か取って舞台上に置くと、膝をついて釘を打ち始める。釘を打つ音を聞いて、楽屋のドアから舞台監督が駆けつけてくる。

舞台監督 おい、なにしてるんだ？

大道具係 なにしてるかですって？ 釘を打っているんですって。

舞台監督 こんな時間にか？（時計を見る）もう十時半じゃないか。

もうすぐ稽古のために監督がやってくるんだぞ。

大道具係 でも、私だって仕事する時間が必要なんです！
舞台監督 時間はあるよ、いまはないが。

大道具係 じゃあ、いつならいいんですか？

舞台監督 稽古とぶつからない時ならいいさ。さあさあ、全部片付けてくれ。『役割のゲーム』の第二幕の準備をさせてくれよ。

大道具係は不満そうにため息をつき、ぶつぶつ言いながら、板を拾い上げると去って行く。一方、舞台出入口からは、劇団員の男女が、初めにひとり、次にもうひとり、その次は二人と、めいめい勝手に入ってくる。全部で九人もしくは十人、これは本日の予定演目に記されたピランテッロの喜劇『役割のゲーム』の稽古で、役を演じるのに必要とされる人数である。劇団員たちは舞台上に登場すると、舞台監督に挨拶し、劇団員同士も互いに「こんにちは」と挨拶を交わす。自分の楽屋に向かつていく者もいるが、その他の者たち——丸めた台本を脇に挟んだプロンプターも含む——は、稽古を始めるため、舞台上に留まって、監督の到着を待つ。彼らは座っておしゃべりしたり、立ったまま言葉を交わし合う。ある者はタバコを吸い、ある者は配役に不満を述べ、またある者は演劇新聞の記事を大声で仲間を読み聞かせる。男優も女優も、どちらかと言えば明るい色の派手な服を着用するとよい。また、この最初の即興的な場面は構えずに生き生きと演じられると良い。ある時点で俳優の一人がピアノに向かってダンスの曲を弾き始めるのも良い。その場合、男優と女優のうち、最も若い者たちが最初に踊り始めること。

舞台監督（練習を始めるため、手を打ち鳴らして）さあさあ、そこまで！ 監督さんがいらしたぞ！

にわかに音が止み、ダンスがストップする。俳優たちは客席を振り返って見る。客席のドアから、監督兼座長が入ってくるのが見える。彼は山高帽を被ってステッキを持ち、口には大きな葉巻をくわえて、役者たちの挨拶を受けながら、座席の間の通路を通り抜けて、舞台へと上がる階段の片方を上がる。秘書は彼に郵便物を差し出す。新聞が何紙かと、印刷物扱いの帯がかかった台本である。

座長 手紙は？

秘書 ありません。郵便物はこれで全部です。

座長（印刷物扱いで届いた台本を手に取りながら）楽屋へ行って行ってくれ。（それから周囲を見渡すと、舞台監督の方を向いて）おっと、よく見えないぞ。明かりを付けてくれないか。

舞台監督 くださいま。

座長は指示を出しに向かう。少したって、俳優たちがいる舞台の上手全体が、明るい白い光で照らされる。その間にプロンプターはプロンプターボックスに入り、ライトを点け、台本を広げる。

座長（手をたたきながら）さあさあ、始めよう。（舞台監督に）全員揃ったかな？

舞台監督 主演女優がいません。

座長 毎度のことですな！（時計を見て）すでに開始時刻から一分遅れている。頼むが記録しておいてくれ。そうすれば今は稽古に遅刻しないようになるだろう。

座長が非難の言葉を言い終わらぬうちに、客席の奥から主演女優の声が聞こえてくる。

主演女優 やめてやめて、お願いだから！ 私、来ましたから！

主演女優は全身白づくめの服装。高慢ちに大きな帽子を被り、腕には可愛らしい子犬を抱えている。客席通路を走り抜けると、舞台への階段の片方を大急ぎで駆け上がる。

座長 あなたは常に人を待たせるという誓いをお立てになっているんですな。

主演女優 ごめんなさい。間に合うように、車を探したんですけど。でも、まだ始まっていなかったのね。それに私も、すぐ出番ではありませんし。（それから舞台監督を名前で呼ぶと、子犬を渡して）お願いだから、私の楽屋に閉じ込めておいてちょうだい。

座長（ぶつぶつ言いながら）子犬まで連れてくるとは！ 役者の数が足りていないとでも言うつもりか。（再び手を叩くと、プロンプターに向かい）さあさあ、『役割のゲーム』の第二幕だ。（肘掛け椅子に座ると）さあ諸君、この中で出演するのは誰だ？

俳優たちは舞台前面を空け、稽古を始める三人と主演女優以外

は脇に座る。主演女優は座長の言葉に耳を貸さず、二つの小机のうちの一つの前に座る。

座長（主演女優に）あなたはこの場面に出演するのかね？

主演女優 私ですか、いいえ。

座長（うんざりして）では、どいていて、まったく！

主演女優は立ち上がると、すでに引つ込んだ他の俳優たちの隣に座る。

座長（プロンプターに）さあ、始めてくれ。

プロンプター（台本を読みながら）「レオーネ・ガーラの家。奇妙な食堂と書斎」。

座長（舞台監督の方に向かって）部屋の色は赤にしよう。

舞台監督（紙に書いて）赤ですね。わかりました。

プロンプター（台本を読み続ける）「食事の支度が出来たテーブルと、本や書類が載った書き物机。本棚および豪華な食器類の並んだ食器棚。舞台奥にレオーネの寝室に通じる出入り口。舞台下手に台所に通じる出入り口。入退場口は上手。」

座長（立ち上がって指さしながら）さあ、よく聞いてください。

入退場口はあちらだ。台所はこちら。（ソクラテス役の俳優に向かって）君はこちら側から出入りすること。（舞台監督に）舞台奥に扉を付けて、カーテンも付けてくれ。（再び座る）

舞台監督（メモして）わかりました。

プロンプター（先ほど同様、台本を読んで）「第一場。レオーネ・ガーラ、ガイド・ヴェナンツイ、フィリップ通称ソクラテス」

（座長に）ト書きも読む必要ありますか？

座長 もちろん！ 何度も言ったじゃないか！

プロンプター（先ほど同様台本を読んで）「幕が上がったら、コック帽とエプロンを着けたレオーネ・ガーラはボールに入った卵を玉じゃくして夢中になってかき回している。フィリップもコックの恰好で、別の卵をかき回している。ガイド・ヴェナンツイは座って聞いている」

主演男優（座長に）すみません、本当にコック帽を被らなければなりませんか？

座長（異議に気を悪くして）そのようだね！ ここにそう書いてある！（台本を指さして）

主演男優 でも、滑稽じゃありませんか！

座長（激高して勢いよく立ち上がり）「滑稽！ 滑稽！」フランスからもはや良い喜劇がやってこないせいで、我々はピランデッロの喜劇を上演するしかない。それなのに私にどうしろって言うんだね？「ピランデッロが分かる人は本当に素晴らしい。彼の喜劇は俳優も批評家も観客も決して満足できないように、わざと作ってあるんだから。（俳優たちは笑う。すると座長は立ち上がり、主演男優の近くにやってくる就叫ぶ）そうだ、コック帽だ！そして卵をかき混ぜるんだ！君は卵をかき混ぜる以外、何もしくていいと思っているのかね？残念だね！君はかき混ぜる卵の殻を表現しなくてはならないんだ！（俳優たちは再び笑い、皮肉な態度で論評し始める）静粛に！私が説明している時には聞くように！（再び主演男優に向かって）そうだ、殻だよ。つまりは盲目の本能が中に詰まっていらない、理性の空虚な形なんだ！君は理性で、妻は本能なんだ。割り当てられた役のゲームで、自

分の役を演じる君は、お望み通り君自身の操り人形なんだ。お分
かりかな？

主演男優（両腕を開いて） 私には、わかりません！

座長（席に戻り） 私もだ！ さあ、進めよう、そうすれば最後に
は私もお褒めいただけるだろう！（親しげに）頼むから上っ張り
を着てくれ、さもなければ、難しいやり取りのなか、君は観客か
ら気にされなくなってしまう。そうなたらおしまいだ！（再び
手を叩いて）さあさあ、始めよう！

プロンプター すみません、監督、プロンプター・ボックスにカバ
ーを付けてもいいですか？ 風が強いんで！

座長 もちろん、付けなさい！

そうこうする間、飾り紐付きの帽子を被った劇場案内係が客席
に入ってくる。彼は通路を横切ると、舞台に近づいてきて、監
督兼座長に六人の登場人物の到着を告げる。登場人物たちも客
席に入ってきていて、途方に暮れ当惑した表情で周囲を見回し
ながら、案内係の後ろから距離を置いて続く。

この喜劇の舞台化を試みようとする者は、「六人の登場人物」
が決して劇団員たちと混同されないよう、あらゆる手を尽く
さなくてはならない。六人の登場人物が舞台上上がった時、ど
の位置に立つか、ト書きに書かれていれば、間違ひなく有用だ
ろう。専用スポットライトを使って、ひとりひとりを異なる色
で照らしてもよい。だがここでは、さらに効果的かつ適切な方
法として、登場人物への仮面の使用を提案する。汗でぶやけず、
同時にそれを被る俳優たちが軽く感じるような素材で特別に作
られた、目や鼻孔や口を自由に動かせるようにカットされて細

工された仮面である。仮面の使用により、喜劇の深い意味も表
現されるだろう。「登場人物」は、事実「幽霊」のように見え
てはならず、「創造された現実」、想像力による不変の構築物の
ように見えなくてはならない。故に彼らは俳優たちの不安定な
自然さに比べ、現実的で確固としているのである。仮面は人物
が芸術のために作られ、各自が個々の根底にある感情を示す表
情に、変わらぬよう固定されたという印象をもたらす手助けと
なる。個々の根底にある感情とは、すなわち「父親」の「後
悔」、「継娘」の「復讐」、「息子」の「怒り」、「母親」の「悲し
み」である。「母親」の「悲しみ」は、教会に置かれた絵画や
彫刻の「悲しみの聖母」像のように、目の下の鉛色のくまや、
頬に沿って固定された、蠟で出来た涙で表される。彫像のよう
にしっかりとした髻があり、ボリュームのある、生地も型も特
別な、かつ突飛ではない衣装も用いるとよい。要するに、どの
町の商店でも買え、どの仕立屋でも仕立てられるような素材で
できていると感じさせなければ良い。「父親」は五十代、髪は
薄いが禿げてはおらず、赤みがかった金髪で、まだ瑞々しい口
の周りに濃い髭を渦巻きのように生やしているが、その口には
頻繁にためらいがちで空虚な微笑が浮かぶ。顔色は明らかに青
白く、額は広い。卵形の青い目は、鋭く光っている。明るい色
のスボンと暗い色の上着を着けている。時折甘い言葉を口にし
るかと思えば、辛辣で厳しい言葉を吐く。「母親」は、恥ずか
しさと落胆の耐えきれない重みに震え上がり、押しつぶされた
かのような顔である。寡婦用の黒く厚いベールを被り、慎ましく黒
い衣装を着ている。ベールを上げる時には苦しんでいるようでは
ない、蠟でできたような顔を見せ、視線を常に伏せている。

継娘は十八歳、自信過剰でほとんど図々しいほどである。非常に美しく、母親同様喪服を着用しているが、際だって優雅である。弟の、おどおどと悩んでいるような、途方に暮れたような様子を軽蔑している。弟は十四歳のやつれた少年で、やはり黒い服を着ている。継娘はだが、一方で妹に対しては大変な優しさを見せる。妹は四歳ぐらゐの女の子で、白い服を着ているが、腰に絹の黒い帯を巻いている。

「息子」は二十二歳で、背が高く、ほとんど意固地になって、「父親」に対する怒りを抑え、「母親」に対する不機嫌な無関心を示している。紫色の上着を着て、首に緑色の長いマフラーを巻いている。

劇場案内係（帽子を手に持って）失礼します、コンシヤクタ叙勲者さま。
座長（怒って尊大に）まだなにか用か？

劇場案内係（おそるおそる）あなた様にご用があるという方々がいらしています。

座長と俳優たちは驚いて振り向き、舞台の上から客席を見つめる。

座長（再び激怒して）稽古中なんだぞ！稽古中は誰も入れてはいけないと知っているだろう？（客席の後ろの方に向かって）どなたですか？なんのご用ですか？

父親（前に進み出る。他の者たちは彼に続く。二つある階段の片方までやってきて）私たちは作者を探しているんです。

座長（半ば驚き半ば怒って）作者をですって？どの作者です

か？

父親 どの作者でも良いんです。

座長 だが、ここには作者はおられません。目下稽古しているのは新作喜劇ではないので。

継娘（明るく活発に、大急ぎで階段を駆け上り）では、その方がずっといいわ！私たちが新作喜劇になれますから。

俳優の一人（他の俳優たちがガヤガヤ話し、笑う中）おいおい、聞けよ！

父親（舞台上で継娘に続いて）そうです、しかし作者がいないんですしたら！（座長に）もし、あなたご自身が作者になりたくないということであれば……

女の子の手を引いた母親と少年は、階段の最初の何段かを上るとそこで待機する。息子は不機嫌な様子で階段下に留まっています。

座長 皆さん、ふざけてるんですか？

父親 いえ、何をおっしゃるんですか！反対に、悲しいドラマをお持ちしたんですよ。

継娘 私たち、あなたを大成功させてあげられるかもよ！

座長 かしなながら、お引き取り願えませんか。気が狂った人たちに時間を割く余裕はないので。

父親（傷ついた様子で、と同時に媚びるように）ああ、あなたはおわかりですよ。人生は訳の分からないことではないで、そうしたことは厚かましいことに真実らしく見える必要すらない。なぜなら真実だからです。

座長 一体何をおっしゃっているんです？

父親 実際、気が狂っていると思われてしまうかもしれません。それとは反対の事をしようと努力することは。反対の事とはつまり、真実に見えるよう、真実らしさを作り出すことです。でも一言言わせていただければ、もし狂気が存在するとすれば、それがあなたの方の職業の、唯一の動機なのではないでしょうか。

俳優たちは憤慨して騒ぐ。

座長 (立ち上がると、父親を注意深く観察して) そうなんですか？ あなたには、我々の職業が狂っているように思える？

父親 ええ、存在しないものを、真実のように見せるんですよ。必要に駆られてではなく、楽しみのために……あなた方の仕事は、舞台の上で想像上の登場人物に生命を与えることではないんですか？

座長 (間髪入れず、俳優たちの中に湧き上がる怒りの声を代弁して) 喜劇役者という職業は、この上なく高貴な仕事だと思っただきたい！ たとえ昨今のように、新しい喜劇作家さまさまが、馬鹿馬鹿しい喜劇を上演させたり、人間ではなく操り人形に演じさせたとしても、ここで——この舞台の上で、不滅の作品に生を与えたことは、我々の誇りなのだご理解いただきたい！

俳優たちは喜んで座長の言葉に同意し、拍手喝采する。

父親 (拍手を遮り、意気込んでまくしたてる) そう！ 結構です！ 息をして服を着ている者たちよりも、ずっと生き生きして

いる、そうした存在に生をお与えになったのだと！ おそらく服を着た者たちより、現実的な存在ではないにしても。だが、より真(まこと)の存在だ！ あなたのご意見に心底同意いたしません！

俳優たちは啞然として互いに見つめ合う。

監督 なんですって！ 前にあなたがおっしゃっていたことは

……

父親 いえ、すみません、私はこう申し上げたいのです。つまり、あなたは私たちに、気が狂った人たちに割く時間はないとおっしゃいましたが、あなた以上に、理解なさっている方はいない。人間の想像力に、より高度な創作を続けさせるのに、自然以上の道具はない、ということなのです。

座長 結構、結構です。でもだからといって、何がおっしゃりたいんですか？

父親 いや、何でも。人はさまざまな方法で、さまざまな形で、生まれてくるのだと言うことを申し上げたいのです。木や石、水、蝶々、あるいは……女性。登場人物として生まれることだってあるんです！

座長 (皮肉っぽくわざと驚いて) で、あなたは、そちらの方々と一緒に、登場人物としてお生まれになったと？

父親 おっしゃる通りです。そして、ご覧の通り、こうして生きております。

座長と俳優たちは冗談を聞いたかのようにどっと笑う。

訳者プロフィール

ス「アンドロマケ」(同6、一九九二)、

メナンドロス「デイスコロス」(『ギリシ

ア喜劇全集』5、二〇〇九)、ソポクレ

ス「アンティゴネ」(二〇〇三)など。

著書・『ギリシア』(一九九五)など。

井上優(いのうえ・まさる)

明治大学文学部専任准教授。日本演劇学

会事務局長。専門は演劇学・西洋演劇史。

編著書『シェイクスピアと日本』(二〇

一五)、共訳書『シェイクスピア映画論』

(ラッセル・ジャクソン編、二〇〇四)、

他。

二〇〇一)など。

田尻陽一(たじり・よういち)

関西外国語大学名誉教授。専門はスペイ

ン演劇。劇団クセックATC翻訳・脚

本担当。主な訳書に『現代スペイン演

劇選集』全三巻(監修・翻訳、二〇一

四〜一六)、『セルバンテス全集戯曲集』

(監修・翻訳、二〇一八)、カルデロン作

『人生は夢』(翻訳・解説『新訂ベスト・

ブレイズ』所収、二〇一二)、『21世紀の

スペイン演劇』第1巻(二〇一九)など。

大谷理奈(おおたに・りな)

ソルボンヌ大学院博士課程在籍。慶

應義塾大学大学院博士課程単位取得退

学。専門は20世紀フランス演劇、劇作

家・観客間の相互作用。字幕操作や戯

曲翻訳等、演劇制作の現場にも携わる。

« La Réception initiale du théâtre de Jean

Anouilh à Londres et à New York » (CEP

Université Keio. Vol.20, p.32-47. 2015.)

等。

奥香織(おく・かおり)

明治大学文学部専任講師。博士(フラ

北野雅弘(きたの・まさひろ)

群馬県立女子大学教授。専門は美学・

演劇学。『オイディプス王』(翻訳・解

説『新訂ベスト・ブレイズ』所収、二〇

一一)、西洋演劇論アンソロジー(共著、

二〇一九)、『Democracy and Athenian

Tragedy: Parthēsia as a Structural Em-

bodiment, English Journal of JSTR (二

〇一八)、『芸術作品の定義』(群馬県立

女子大学紀要39、二〇一八)

西村太良(にしむら・たろう)

慶應義塾大学名誉教授。同大学文学部長、

文学研究科委員長、慶應義塾常任理事、

言語文化研究所所長等を歴任。翻訳・ア

イスキュロス「ペルサイ」(『ギリシア

悲劇全集2』、一九九二)、エウリピデ

ンス文学・文明)。専門は近代フランス演劇。「感覚の知を表象する場としてのマリヴォー劇―恋の不意打ち」の構造と機能をめぐって」(論文、二〇一六)、「初期オペラ・コミックのドラマトウルギー―権力、観客との関係性をめぐって」(論文、二〇一六)、『*Théâtrales: tradition et innovation*』(共著、二〇一五)。

安田比呂志(やすだ・ひろし)

開智国際大学教授。専門はイギリス演劇・文学。「1763年5月12日の『リア王』―18世紀ロンドンにおける観劇体験に関する一考察」(論文、二〇一七)、『シェイクスピアへの架け橋』(共著、一九八八)、『異文化への道標』(共著)、デヴィッド・パンター『恐怖の文学』(共訳、二〇一六)など。

鈴木国男(すずき・くにお)

共立女子大学文学芸学部教授。専門はイタリア演劇・音楽劇研究。「イタリア地中海研究叢書―ダンヌンツィオに夢中だった頃」(共著、二〇一五)、翻訳上演台本カルロ・ゴルドーニ『珈琲店』など。

新沼智之(にいぬま・ともゆき)

玉川大学准教授。専門は演劇学・西洋演劇史。主にドイツを中心とする西洋演劇の近代化のプロセスを研究。「演技の近代化プロセスにおけるゲーテの演劇観」(論文、二〇一九)、『A.W.イフランドが目指した舞台づくり―視覚的要素の問題を中心に』(論文、二〇一五)、「18世紀後半のドイツにおけるアンサンブル演技理念の萌芽と劇団規則」(論文、二〇一三)、『フィッシャーリヒテ』演劇学へのいざない『研究の基礎』(共訳、二〇一三)。

毛利三彌(もうり・みつや)

成城大学名誉教授(演劇学)、文学博士、ノルウェー学士院会員、元日本演劇学会会長。主な著書『イブセンのリアリズム―中期問題劇の研究』(一九八三)、『イブセンの世紀末―後期作品の研究』(一九九五)、『演劇の詩学―劇上演の構造分析』(二〇〇七)、『東西演劇の比較』(編著、一九九三)、『演劇論の変貌』(編著、二〇〇七)、『東アジア古典演劇の伝統と近代』(編著、二〇一九)。翻訳『イブセン戯曲選集―現代劇全作品』(一

九九七)、『イブセン現代劇上演台本集』(二〇一四)。

永田靖(ながた・やすし)

鳥取女子短期大学助教授を経て、現在、大阪大学大学院文学研究科教授、IFTR国際演劇学会アジア演劇WG代表、日本演劇学会会長。専門は演劇学、近代演劇史。主に日本・アジア地域の演劇接触の研究と研究ネットワークの構築を行っている。共編著に『*Modernization of Asian Theatres*』(2019)、『歌舞伎と革命ロシア』(二〇一七)、『共著に『*Transnational Performance, Identity and Mobility in Asia*』(2018)、『*Adapting Chekhov The Text and its Mutations*』(2013)、『アヴァンギャルドの世紀』(二〇〇一)、翻訳に『ポストモダン文化のパフォーマー』(一九九四)等、多数。

大崎さやの(おおさき・さやの)

東京大学文学部および教養学部非常勤講師。東京大学にて博士(文学)。専門はイタリアの演劇と文学。著書『オペラ学の地平』(共著、二〇〇九)他。訳書『アルフィエーリ 自伝』(共訳、二〇〇

一、人文書院、『西洋演劇論アンソロジー』（共著・共訳、二〇一九）他。論文「ルイージ・リッコボーニの『演技術について』—イタリヤにおける演技論の伝統を背景に」（演劇学論集第67号、二〇一九）他。

執筆者プロフィール

本杉省三（もとすぎ・しょうぞう）

劇場計画研究者（日本大学名誉教授）。ベルリン自由大学演劇研究所留学（一九八一—八三年 DAAD）、この間ベルリン・ドイツオペラ、シヤウビューエ劇場で研究・実習。シアターコクーン、新国立劇場、愛知芸術文化センター、なら100年会館、ビックハート出雲、Kunstlinie Almere、キジもと市民芸術館、台中国家歌劇院、鶴岡市文化会館等の計画・設計に関わる。「劇場空間の源流」（単著、二〇一五）、「劇場・コンサートホール」（共著、一九九五）等。

辻佐保子（つじ・さほこ）

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館招聘研究員。早稲田大学文学学術院表象・メディア論コース博士後期課程単位取得退学。専門はアメリカン・ミュージカル、ミュージカル映画。主要論文に「ミュージカル『ピリオン・ダラー・ベイビー』

における号外の機能とその劇的意義について」（二〇一七）、「ミュージカル『特急二十世紀号に乗って』における楽曲の機能」（二〇一四）。

ベスト・プレイズⅡ——西洋古典戯曲 13 選

2020年2月10日 初版第1刷印刷

2020年2月20日 初版第1刷発行

編者 日本演劇学会分科会
西洋比較演劇研究会
代表 小菅隼人

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03(3264)5254 fax. 03(3264)5232

振替口座 00160-1-155266 <http://www.ronso.co.jp/>

装幀 山元伸子

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1882-5 ©2020 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。